

平成29年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成30年3月30日

報告者	学科名	保健福祉学科	職名	教授	氏名	吉永 早苗
研究課題	乳幼児と保育者間の応答的歌唱プログラム「語りから歌唱へ」の開発—パラ言語に着目した観察調査に基づいて					
研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	吉永早苗	保健福祉学科・教授	子ども学 音感受教育	研究の総括、音感受研究からのアプローチ。調査の実施、プログラム開発	
	分担者	樟本千里	保健福祉学科・講師	発達心理学	発達心理学・言葉の発達からのアプローチ。調査の実施、プログラム開発	
研究実績の概要	分担者	水崎 誠	東京学芸大学・准教授	音楽教育	幼児の発声・音楽表現からのアプローチ。プログラム開発	
	<p>【レビュー及び研究の意義】 乳児保育室に伺うと、保育者と乳児との柔らかな音声のやりとりがある。この対乳児音声（マザリーズ）は、「単に赤ちゃんに“話しかけるためのテクニック”ではない。話しかけようとする内容を“ことば”で伝えながらも、あたかも歌のような変化範囲の大きい抑揚と拍節的なリズムをもたせることで、情緒的な親密さや、親や保育者の気持ちを明確に伝える情報を内包させることに意味がある」（志村2016）。一方児童期において、一部の児童に落ち着きのない行動が目立った授業が収録された録音テープを観察した有賀ら（2009）は、「音圧レベルでの声の強さは認められるものの、イントネーションの変化、声の高さ・抑揚などの韻律情報があまり認められない」と問題提起し、教師の発話におけるパラ言語情報に関する一連の調査から、「教師の音声言語において表現される抑揚の効いたパラ言語情報は、児童自身の言語獲得のためのモデルを常に提示すると共に、児童にとって教室内の他の児童とのコミュニケーションを促進する意味でも重要となる」と述べている（有賀2012）。乳児期の歌い掛けるような保育者の音声は、児童期までにどのように変化していくか。本調査では、3歳から5歳までの幼児が混在する異年齢混合保育が行われている岡山県の保育園において、保育者の語り掛けがリズムカルになったり抑揚が豊かになったりする場面を拾い上げることにより、その状況を明らかにする。</p> <p>【方法】 調査は、2017年11月6日及び12月18日、21日の計3回、午前10時から11時半まで、保育園の3歳～5歳児の異年齢混合保育（32名）を対象に非参与観察を行った。保育者の背面にICレコーダを設置すると共に、幼児と保育者とのやり取りを録画した。このうち本調査では、保育者が幼児全体と会話している場面を分析対象とした。</p>					

※ 次ページに続く

<p>研究実績 の概要</p>	<p>【結果】 観察で得られた会話から、「音色」「リズム」「速度」「旋律（抑揚）」「強弱」「フレーズ感」といった音楽的要素がみられる発話を抽出した。事例の一部を以下に挙げる。</p> <p>①11月6日： 全体に向けて絵本を読もうとして話し掛ける。「私ね～、お休みの日にね～、図書館に行つてね～」と保育者がまとまりよくリズムカルに話し始めるとすぐに、幼児が「土曜日じゃろ～?」「あ、わかった。大きいやつ、持ってきたんでしょ」など答える。またイントネーションの変化を大きくするだけでなく、「どの本から読もうかなーって迷ったんだけど」と低い音から順に声を上昇させる話し方もあった。</p> <p>②12月18日： サンタクロースへの質問を問い掛ける。幼児は口々に答えようとして賑やかになるが、保育者が「最初は緑色の手紙が来とったんよなー」と語気を徐々に強めて（クレッシェンドのように）言い切った後に間をとり、急に弱く低い声で「そしたら消えたんよなー」と話すことで全体は水を打ったように静かになる。また、「サンタクロースにプレゼントをあげたい」という意見に対する「ええなあ、ほんまじゃなあ、もらうばあじゃ、悪いもんな」との返答は4拍にまとめられ、$f \rightarrow ff \rightarrow mp \rightarrow p$のように強さを変えて話していた。</p> <p>③12月21日： お正月に向けて、干支についての話が始まる。覚えた干支を声に出したい幼児に向かい、「じゃあみんなで行ってみようか。ネズミのねーからどーぞ!」と、前半はふつうに、後半は拍節的に「タタタタ、タンタタ、タータン」のリズムで語り掛けることにより、幼児の唱えるテンポが揃う。また、一文全体を、弧を描くような抑揚で話したり、あるいはわざと平坦に話したりする等、文意を伝える工夫が感じられた。</p> <p>【研究の成果】 マザリーズには(1)発話する声全体が高い (2)抑揚が大きい (3)ゆっくり話す (4)発話と発話の間をとり、相手の反応を待つ (5)同じ言葉を繰り返すといった音声特徴がある（志村 2016）。一方、本観察では(1)発話する声は高くない (2)抑揚を大きく表現するだけでなく、わざと平坦に話すことがある (3)緩急の変化 (4)間の取り方の工夫 (5)同じ言葉を繰り返す時、強さ・速さを変化させる (6)拍節的・リズムカルに話す (7)まとまりよく話すことによるフレーズ感 (8)声質の変化 (9)subito piano（突然弱く）やクレッシェンド等、多様な要素が抽出された。また、語尾に付く「な」も、「なあ」「な!」「な～」と場面により表現が変化している。保育者自身は「意識していない」とのことであったが、その発話は時としてオペラのレチタティーヴォ（朗唱）のように幼児に届けられる。乳児期以降の保育者の対幼児音声は、平板にはならず、より豊かに音楽的要素を増して表現される。そのことが幼児との円滑なコミュニケーションに繋がると考える。</p>
<p>成果資料目録</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 5月に開催される保育学会にて発表予定 ・ 光生館「保育内容 表現」（3月30日発刊）において、編著者として、0～3歳児の表現の発達と保育者の語りかけ（応答的保育）、およびマザリーズについて執筆した。